SHINGON HORONIC

色 は 匂 へ ど

IRO WA NIO E DO

PHOTO SHU FUJIWARA

特集　真言密教と日本文化１能の世界

平成十三年文月一日発行　巻十九

PHOTO　SHU FUJIWARA

器量

人にはそれぞれ器があって
他とは代え難い
大きな器、小さな器、美しい器、強い器
様々な器が映しあって、豊かな彩りを生む

イチローは松井になれない
もしイチローが松井のようなホームランバッターを
目指していたら今のイチローはいない

自分の器量をしり　己の器量を磨く
自己の器量を磨き続けたとき

器量はより大きく、美しくなり
さらに豊かなものが、その器を満たす

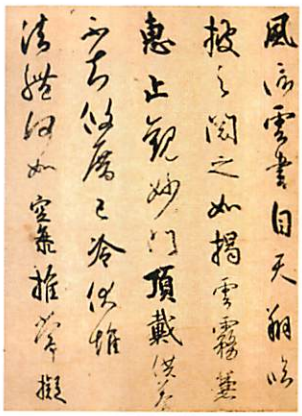
編集主幹　阿部龍樹

特集　真言密教と日本文化
能の世界　3

お釈迦さまの真理の花束　9

現代の道しるべ　13

『風信帖に思う』　東寺　寺務長　砂原秀遍



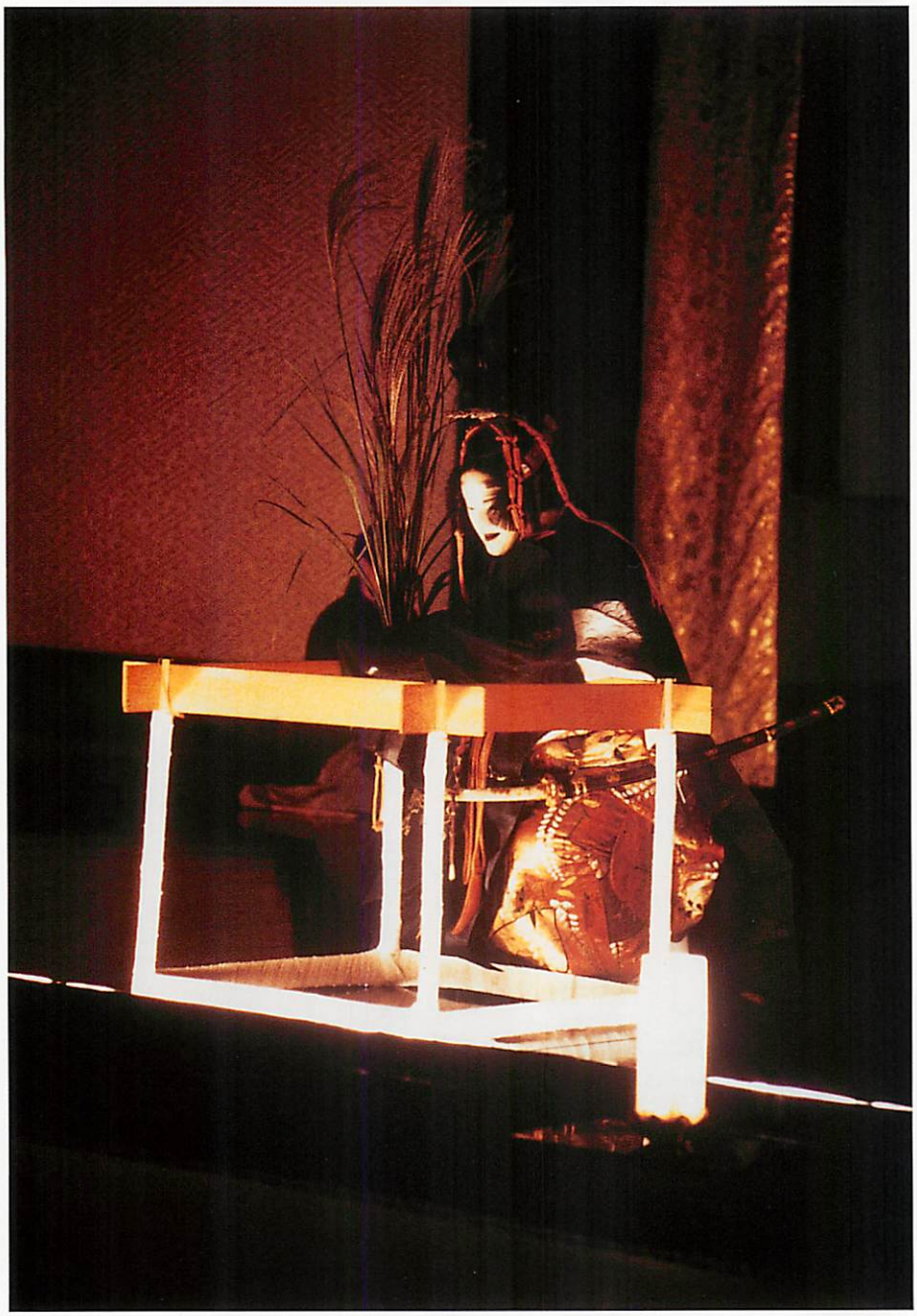
墨蹟聚集の会報より　11

弘法大師の芸術論　七
精神文化史　研究家　西宮　紘　15

新刊の紹介　15

特集　真言密教と日本文化　能の世界

幽玄、現世と来世、生と死、愛と別離、男と女、迷いと悟りが美しく交錯する世界



幽玄能の至高、『井筒』シテ梅若六郎

能は春日大社の松ヶ枝の上に天から舞い降りた翁から始まった

『道成寺』シテ友枝昭夫

能は間の芸術。高い緊張感の中での道成寺の乱拍子。シテと鼓が間を次第に詰め極限でシテは鐘に飛び入る。

能の発祥の地は興福寺だといわれている。興福寺の僧が毎日、春日大社の老松のもとで経を唱えていると、天から翁が舞い降り松ヶ枝の上で舞を舞った。僧が驚き尋ねると私は春日明神だが有り難い経を毎日聞ける喜びに感謝して舞を奉じたと。

また春日大社の若宮のおん祭りでは、ご神体を山上から御旅所に勧請し、そこでは奉納の舞が老松の前で今でも舞われる。今でも能舞台には必ず老松が描かれている。

奈良興福寺は藤原氏の氏寺であったが藤原冬嗣と弘法大師が深い関わりのなかで、南円堂を建立され庶民に開かれた寺になってゆく。

興福寺だけではなく東大寺を始め奈良仏教全体が弘法大師との大きな絆の中で、深い真言の教えを受け入れ密教化してゆく。

いまも東大寺は真言密教の根本経典、理趣経を毎日読誦し、お水取りで有名な二月堂の裏側の護摩堂では毎日僧侶が護摩を修行している姿を拝することが出来る。奈良仏教と真言密教が豊かに交流し日本文化を育んできた大きな流れは明治まで続いている。奈良法隆寺は明治初期まで真言宗であったことでもその関わりの深さがわかる。

能の大きな特徴は心の変容性にある

能は前半と後半に分けて演じられる。多くの場合前半ではワキと呼ばれる諸国を旅する僧が名所旧跡を尋ねると、シテが美しい公達や匂うような女性（にょしょう）として現れその旧跡のいわれをまるで人ごとのように語り、また消えてしまう。

後半ではその公達や女性が本性を現す。その本性は過去への妄執に苦しむ迷いの世界、輪廻し苦しむ姿がさらけ出される。

戦いに敗れた怨念から修羅道に堕ちた若き公達や、男に棄てられ、世に忘れられた美しき女が愛執と過去の栄華への妄執から時には蛇となり般若となり、また生き霊や亡霊となって苦しむ姿が能舞台に展開される。

しかしやがて怨念や妄執、怒り恨みは僧の供養や経典の功徳によって晴らされシテは迷いの世界から悟りの世界へと導かれていく。

能は布教劇であり勧進能でありまた人々の迷いを絶ち、救済し正しき道へ誘う深い教えが秘められている。

迷いから悟りへ　夢から現へ
心の救済を描く卒塔婆小町

高野の僧が都に上るため山をおりる。僧は『お釈迦様はすでに亡く、弥勒様は未だ現れない夢の途中に生まれて、何を真実、心の糧として生きようか。受けがたい人間としてこの世に生を受け、しかも会いがたい仏様の教えに出会えた、これを心の糧、悟りの糧にして生きよう。』

そこに卒塔婆に腰掛ける小町が現れる。

小町『かつては翡翠のかんざしに身を飾り、美しさは春の風のように、しかし今は、はした女にも穢ないと思われるほどの、老醜を百才でさらしている。』

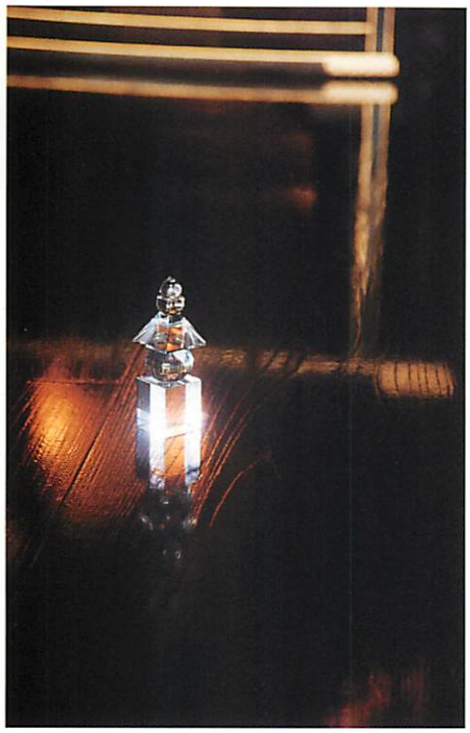
卒塔婆に腰掛ける老婆を見て高野の僧は『かたじけなくも仏様のお姿を象徴する五大を刻んだ卒塔婆に掛けるとは。すぐどきなさい。』

『文字も消え形も定かでない、卒塔婆の意味と形は。』

『卒塔婆は真言第二の祖、金剛薩埵が仮に世に現れ大日如来の誓願を形にした貴いもの。形は宇宙を現す地・水・火・風・空の五大』

『五大、地水火風空なら人にもそなわっている。』

『形は同じでも功徳が違う』
『では卒塔婆の功徳とは』
『一目見ただけで三悪道を離れられる（一見卒塔婆永離三悪道）』
『悟りたいという心を一瞬でも起こすことと変わらない（一念発起菩提心）』
『悟りたいという心があるならなぜ浮き世を厭い出家しないのか』
『心の中でこそ浮き世を厭う形ではなく』
『その心が無いから卒塔婆の形がわからない』
『仏の形がわかるから近づくのだ』
『それならなぜ礼さず尻に敷く』
『どうせ倒れて休んでいるなら私も休んでなぜいけない』
『それは善悪順縁にはずれている』
『仏教は逆縁でも救われるではないか』
ここから小町と僧の掛け合いになり
提婆が悪も　観音の慈悲
般徳が愚痴も　文殊の知恵
悪と言うも　善なり
煩悩もまた　菩提なり
悟りの鏡も　台に無し
本来仏も衆生も隔て無し
と共通認識にたってしまう


地水火風空を現す五輪塔

高野の僧は『まことに悟れる老婆なり』と三度地に頭をつけて礼拝する。
しかし小町自身は実は悟ってるわけではなく、自分が愛を受け入れなかった深草の少将の怨念が自らを狂わせていることを語る。
しかし受け入れても小町の美に執着した少将は小町の美が衰える姿に愛を失う。
絶世の美の故に移ろいにたいする恐怖と現世が夢の途中であって欲しいとねがう心。

僧侶の前で狂乱し悩む真実の姿をさらけ出すことで、小町は初めて救われる。そして今が夢の途中であることを再認識し、真実の悟りの世界を目指すことを誓う。

仏教では今が夢のなかでここから目覚める（悟る）ときはじめて世界が現（真実）となる。
観客もここで漸く小町が救われたことに安堵した自らの心も癒されていく。

道成寺　シテ　友枝昭夫

能の囃子とコイアイ

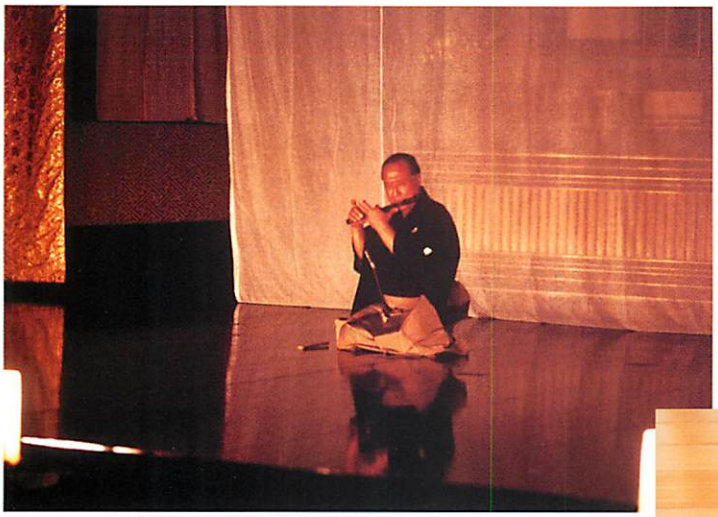
お能の囃子は能管と呼ばれる笛。大小の鼓。そして太鼓。いたってシンプルだ。お能が屋外で始まったことを考えると移動可能な簡単なものが必要だった。そして笛以外の太鼓も大小の鼓もその場で組みあげられる。

能の笛は能管と呼ばれ他の笛とは全く区別される。竹を何枚も細く裂きそれを裏返して笛に仕上げる。しかも笛の中に喉と呼ばれる障碍があって、あえて空気の流れを悪くする。それだけ吹きにくく音は安定しない。西洋音楽の楽器があくまでも透明で天を目指す明快な音を奏でるのとは対照的だ。三味線も一の糸をあえて軸の木に触れさせ他の糸、つまり二の糸や三の糸の音と共鳴させて、いわゆる「さわり」という音の揺らぎを作り出すのと似ている。

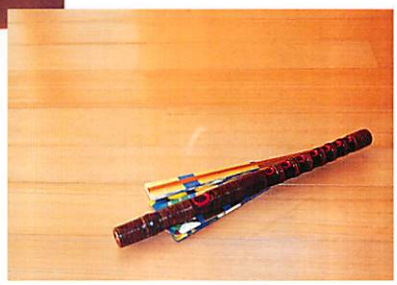
さてお能を観てると眠くなる。鼓が打たれ、しばらく間があって、また大鼓が響く。その間が眠気を誘う。ある時、能の宗家の方に「お能は眠くなりますね。」と言う大変失礼な質問をしたら、「それほどお能は宇宙のリズムというか大きな間の中に演じられるので眠りを誘うのです。」と教えられた。

お能の間をコイアイという。素人には分かりにくいが、その間は八拍子で刻まれている。言葉の切れ目をその拍子からずらしたり、八拍子の間が荘重曲では長く、激しい戦いの曲では速くなる。しかも一曲の中でもその間は変化する。

さらに笛は笛の間を、鼓は鼓の間をシテはシテの間をそれぞれ確立していて、その間は確固たるもので妥協すると曖昧なそ



能管　藤田大五郎



れこそ間の抜けた舞台になってしまう。お互いがお互いの間を奏でながら他者の間を請いそして応ずる（合う）ことがコイアイらしい。

だからそこにたぐいまれな緊張感が生まれてくる。なかでも道成寺の前シテの乱拍子は鼓とシテとの息の詰まるような真剣の上を渡り合うような緊張感のなかで間が詰められて行く。ついにシテが鐘に飛び込む鐘入りとなる。

間を詰めて詰めて詰め切ったときにぱっと次に展開していく。密教の論議法要にはもともとある型で、お能が興福寺の布教劇、勧進能から始まったことを考えると、その影響もあるかと思う。

最近どこの能楽堂も明るくなりすぎた。能面や装束について書く紙数がないが、今の照明の中では微妙に表情を移ろう能面の深みが見えないのは残念だ。

お釈迦さまの真理の花束

As a flower that is lovely, beautiful, and scentladen,
even so fruitful is well-spoken word of one who does it.
As from a heap of flowers many a garland is made,
even so many good deeds should be done by one born a mortal.

如可意華
色美且香
工語有行
必得其福
多集衆妙華
結髪為歩遥
有情積善根
後世轉殊勝

まことに
色うるわしく咲ける花に
薫りのともなうごとく

善く説かれたる　言葉は
これを身に行うとき

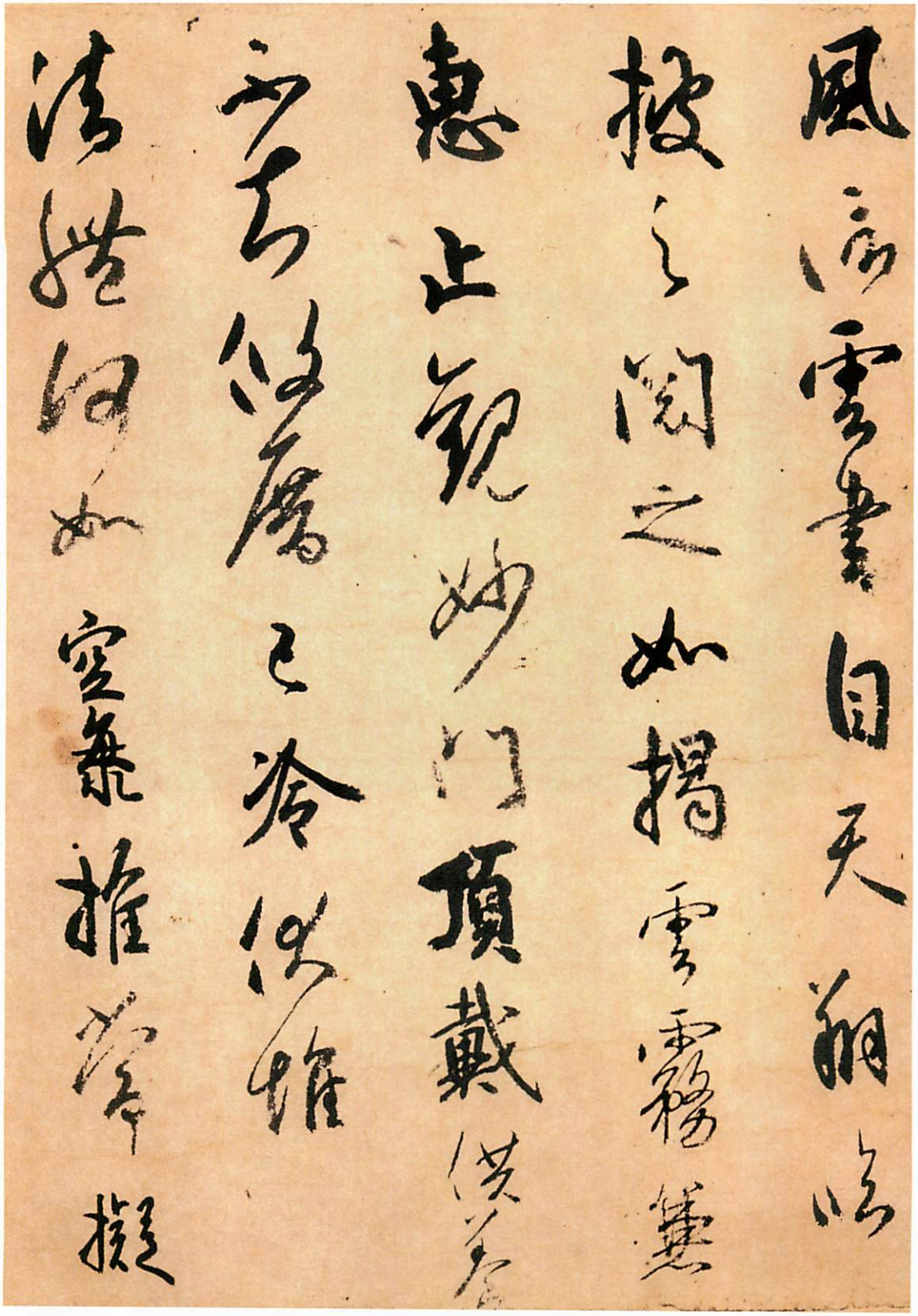
はじめて
その果実(このみ)あらん

うづたかき華(はな)推より
かずかずの華の髪(かざり)を
作りえん

かくのごとくここに
生まれたるもの
ここに死すべきものの

なしとげうべき
善きことは多し

PHOTO&TEXT　SHU　FUJIWARA



東寺蔵　国宝　『風信帖』

『弘法大師墨蹟聚集ー書の曼荼羅世界ー』の申し込み　お申込お問い合わせは
電話０３－３７０５－７２３８　ファクシミリ０３－３７０３－４９７９

『風信帖に思う』

東寺　寺務長　砂原秀遍

『風信帖』は元は五通あり、一通は東寺に納められ、一通は関白豊臣秀次の所望に依り差し上げ、現在三通一巻が国宝として、大切に守り伝えられた弘法大師空海さまの真蹟書状であります。

この三通の手紙は天台宗の開祖である、比叡山の伝教大師最澄さまに宛ててのものでありますので、延暦寺にあったものと考えられます。継ぎ目に延暦寺の印が捺されて居るのです。

書道家のお方は垂涎の的であり、知らないお方はない位に有名なものなのです。しかし私たちはむしろ、その中に書かれた内容に依って、最澄さまと空海さまが、日本の皆様のために仏教について語り合い、これを弘めて、仏恩に報謝すべきことをお誓いになって居られることを知らねばならないと思うものであります。

いわゆる二十世紀という百年間は私達に多くの反省材料を提供して呉れました。

今は国名を日本と呼びますが「大八洲の国」は仏教伝来に依り、「大和の国」と呼ばれましたが伝教・弘法両大師は「大日本国」と呼んでいます。東寺で三年間ご修行された法皇である、第九十一代後宇多天皇の文保三年の御遺告の中にある文章を参考に提しますれば、「夫れおもんみれば、我が大日本国は、法爾の称号、秘教相応法身の土なり、故に我が後に血脈を継ぐの法資・践祚を伝ふるの君主は盛衰を同じくすべく興替を共にすべし。

我が法（仏法）断廃せば皇統も共に廃せん。我が寺（東寺）復興せば、皇業も安泰ならん。

ゆめゆめ吾が此の意に背きて悔ゆること莫からむのみ」と仰せられています。

弘法大師も『性霊集』に「法を四時に取り、形を萬物にかたどる」と、書法を語られます。

真言密教なる空海さまの教えは世界に類いなき教えでありました。

諸仏、諸菩薩、われわれ人間も動物、植物といえども、地水火風空識はすべて大日如来であり法身の異名であるというのです。

我他彼此でなく、つまり相対的に見る科学技術文明の現代に最も忘れられている、絶対的立場に見る密教的眼を培うべきを強調いたしたく思うものであります。

迷悟は我にあり、我が三業（身・口・意）の外に仏身なし、日本を大日如来の本国として大日本国と呼べる二十一世紀を建設したいのであります。

貪・瞋・痴の煩悩が自然に消えて争そう必要が無くなるのが真言密教だったのですから。

政教分離の今日といえど神を崇めて仏壇を祀った家庭であるならば十七才で人殺しをする子供は育たなかった筈です。三教指帰でもお大師さまは「陶染の致す所なり」と十七才（数え十八才）で書かれているのです。

合掌

風信帖の大意

思いがけなく頂いたお手紙で、眼の前が明るくなりました。いつぞやは「止観妙門」をありがとう存じました。お障りありませんか。私も、平常通りです。お言葉の通り、叡山に登ってお会いしたいと思いますが、今は修行中でここを離れられません。

私の願いは、金蘭の交りを頂いている貴方と、室生の修円と三人が一つの処に集まって、これからの仏教をどう弘めるかを語り合あって、法の旗印を高くかかげ、み仏の御恩に報いたいと思います。私が伺えないので、貴方の方で山を下りてここをお尋ね下さい。切望して止みません。

不具

顔が見えない日本と言われる中で。

日本の海外援助（ODA）は世界でもっとも高い金額を拠出しながら、現地の実状に合わなかったりまた顔が見えないなどさまざまな批判がある。一方でNPO（非利益団体）で素晴らしい活動をし大きな成果をあげているJADHSという団体がある。

創設者の冨田洋氏は海洋調査会社に就職。しかし倒産、顧客の利益を守るため自ら起業して、もてる技術から地底の空洞調査を始める。

この技術が認められ、道路の陥没を未然に防ぐための調査で成功するが、それまでに事務所の火事や社員の離反などを乗り越えている。

国連の地雷除去の専門家が冨田氏の技術に着目、冨田氏も世界の地雷による被害の悲惨さに、地雷除去に取り組むことになる。

世界に残留する地雷、その数一億以上、被害に遭う人の数年間一万人以上、その国は六十ヶ国をこえる。本来人が耕したり放牧したりでき経済的な基盤になる土地、また子ども達が学び遊び集える学校やその校舎や校庭に地雷が放置されることによって死の土地、死の校庭になり、去れる人は村を去り、残るしか道の無い家族はその危険と隣り合わせの中での生活を余儀なくされる。その危険な地域の中で僅かな食を得るために牛追いなどをせざるをえず、被害に遭うものは後を絶たない。死を免れても手や足を奪われる者が多い。

金属探知器では反応しないさまざまなニュータイプの地雷が増える中で、冨田氏が開発した地雷探査機マインアイは地下の地雷を三次元映像で液晶画面に明示する。そのセンサーはオムロン、解析はIBMそして炎天下でも見える液晶画面はシャープの技術力による。

しかしその地域村まで入るには、道無き道を重い機材とスタッフを乗せ走破できなければならない。特別仕様のトヨタの四輪駆動車と専用開発したホンダのバイクが道を切り開く。さらに基地を設営。飲み水の確保には東レの浄水器が威力を発揮する。そしてすべての機材を日本郵船が現地へ輸送する。

いよいよ地雷除去。一メートル四方を一人が担当し、まず葦のようなもので仕掛け糸を探る。つぎに草を十五センチずつ細かくかる。そしていよいよ地中に棒を差し地雷を確認する。まさに命を懸けた除去作業だが、冨田氏の技術はその危険な作業に安全とスピードをもたらす。それはとりもなおさず人が安全に住める土地が早く復興し、人々の生活が再開出来ることだ。

日本のロータリークラブ、ソニー、セコムなどがバックアップしある村の地雷が除去され八万坪の土地が浄化された。

冨田氏の活動は土地から地雷を除き

さらに重機をいれ耕す所までと、行き届いている。冨田自身はまもなく迎える五十才でこの活動からはリタイアすると言っておられる。それほど体力的に厳しい活動だが、一人の情熱によって切り開かれた道を企業研修や学校教育に盛り込まれるであろう社会貢献に組み入れられればより大きなうねりが出来るだろう。

マスコミはこうした団体や個人、企業をもっと積極的に紹介すれば良い。

冨田氏の話で一番興味深かったことは、コソボに入った時、スイスやノルウェーなどの人口も経済力もそれほど強くない（少なくとも日本よりは）国が実に積極的に活動していること。そしてその理由は彼らなりの国家戦略で、人道的な活動が活発な国は、かりに経済力が弱くても国際間の評価が高く、他の国から侵略されにくいし、その国の人が海外に出ても安全性が高い。経済力にもかげりが見えてきた日本には興味深い。

実は今から三十年も前に、かつての国連大使の鶴岡千刃さんから同じことを聞いたのを思いだした。軍隊を持たずにどうして国が守れるかをうかがったとき鶴岡さんは

「日本はFIRST AIDを創らなければいけない。つまりこれから災害、地震や津波、台風、火山の爆発、航空機事故、航空機や船舶も技術が進み大型化するけど、事故があったら被害も大きいからね。その時、真っ先に日本の救助隊が行くわけだ。真っ白な飛行機や船に日の丸をつけてね。これはいいよね。日本人は世界中から感謝されるし尊敬されるよ。そんな国はね外国が攻めてこない。」

冨田氏の活躍は国レベルでは利害が対立しがちで、国が入れない微妙な紛争地域へも入れる利点もあり、鶴岡さんが描かれた理想を現実化した一つの形といえるだろう。

JADHS
特定非営利活動法人
人道目的の地雷除去支援の会

〒144-0051　東京都大田区西蒲田8-15-12
電話　03-3731-3650

本の紹介

『柔らかなこころ、静かな想い』

村瀬嘉代子

創元社

今回の特集は『能』。人の心は見がたい。その移ろいや変わりゆく課程も見えにくい。お能はそうした見がたい、心の深層を見事に視覚化した芸術だが、そのことに気づいたのは村瀬先生を知り、臨床心理学という世界に触れてからだ。

村瀬先生は臨床心理の世界では第一人者として多くの人が癒され救われている。そして後進の指導にも熱心で先生の研究や経験は臨床心理を目指す者にとってはかけがえのない書となっている。

一般向けの書は少なかったので、村瀬先生を知る方は少ない。しかし今回の『柔らかなこころ、静かな想い』は先生の幼少の経験や日常の人との触れあいなど、とても読みやすく親しみやすい文章の中に、臨床心理の本質が語られている。

臨床心理というと堅苦しいが、本の中の章は「子供たちは疲れている」「ゆれる心を理解する」「心の上品さ」「家族力」等の今もっとも大切なことが語られている。

そして小さなきっかけでも、人は善き方へと大きく変わりゆくことをも、教えてくれる。

『仏教おもしろ小百科』

春秋社編集部著

春秋社

世界の三大宗教は仏教、キリスト教、イスラム教。西欧はキリスト教国が多く、アジアはイスラムと仏教国が多い。日本は仏教国と位置づけられているが、今の日本人は仏教のことがほとんどわからない。仏教だけではなく日本の神道も、伝統文化、お茶も歌舞伎も歴史も。

現代人に、分かりやすいくだけた入門書が必要な時代に、タイムリーな一冊。

『星の王子様』
サン・テグジュペリ
岩波書店

サンテグジュペリの名作『星の王子様』は、だれでも知っている。しかし意外と読んだ方が少ないのでおどろいた。

著者は危険な夜間飛行で郵便事業の先端を担っていた。

夜間飛行をするとさまざまな不思議な体験をするというが、この本はそんな著者の体験から生まれた素敵な物語。

子供向けの本と思われがちだが、ちゃんとした大人にしか、この物語の真意はわからない。

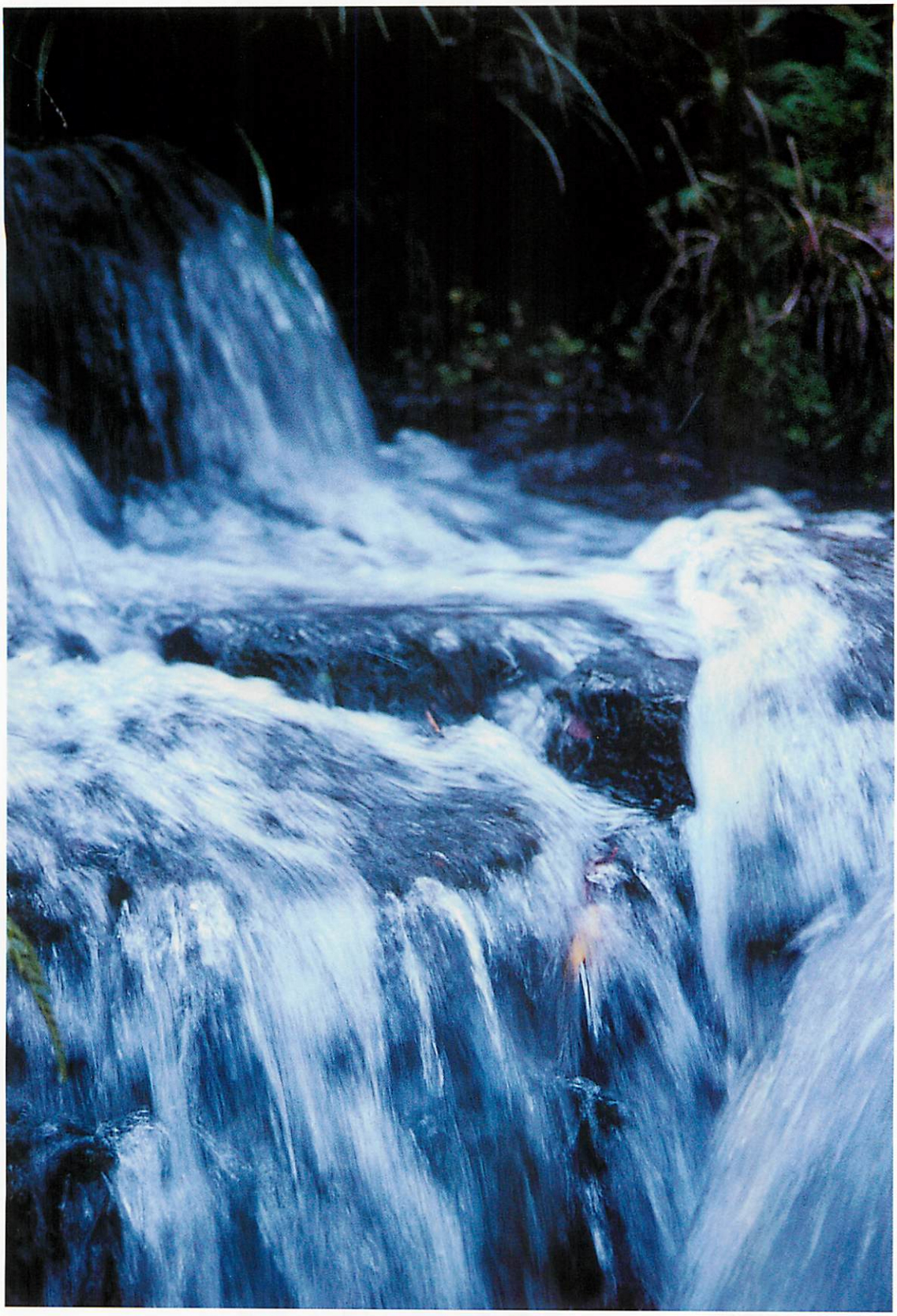
『夜間飛行』
サン・テグジュペリ
みすず書房

『星の王子様』を書くきっかけは、もちろん夜間飛行。そのものを題名にしたこの小説は、夜間飛行の危険と醍醐味を堪能できる。サンテグジュペリのこの二冊は併せて読むと面白い。

『ようこそ能の世界へ』
観世銕之亟
暮らしの手帳社

かつて観世寿夫氏の『井筒』を拝見して、お能の素晴らしさを知った。そして青山の能楽堂銕仙会では、他の能楽堂が大きく明るく、そして見所と舞台が離れていく中で、とても見やすく、演者と観客が一体となれる空間でいくつかのお能を拝見した。

著者は寿夫氏の弟で銕仙会を率いて来られた。能の魅力を美しい写真とともに紹介した、能の善き入門書。



弘法大師の芸術論　七

精神文化史　研究家　西宮　紘

詩というものは志、すなわち心が向かうところにもとづく。心が向かうといっても、単に心に在る状態が「志」である。その「志」が、言葉となって発せられるとき、それが「詩」であるという。とはいえ、「志」がそのまま言葉となって発せられるというわけではない。およそ文章を作るには、「意」を立てねばならない。つまり「志」を発動しなければならないのである。意を立てて詩を作るには、「すなわち須く心を凝らして、そのものを目撃すべし。すなわち心をもってこれを撃ち、深くその境を穿つ。高山の絶頂に登るごとく、下に万象に臨みて、掌中に在るがごとくし、これをもって象（現象界）を見れば、心中にあきらかに見る。ここに当たりてすなわち用うれば、似ざること有るなし（真に迫った形象が得られる）。よりて律をとのえて定め、しかる後にこれを紙に書く」というプロセスを経る。この時、志の発動すなわち「意」は、通常の対象的世界である「万人の境」をいでて（境を穿ち）、「古人を格下に望み（高山の絶頂から万象を臨み）、天海を方寸（胸中）に攢む（宇宙を胸中にとり収める）」のでなければならない。かくして「その題目に会して、山林日月風景を真となし、もってこれを歌詠す。なお水中に日月を見るごとく、文章はこれ景（映像）、物色（自然）はこれ本（実像）なり、これを照らす（映し出す）こと須くあきらかにその象を見るがごとくすべきなり。」こうして「意尽くればすなわち肚（胸中）寛やかなり。肚寛やかなればすなわち詩はのびやかになり、物色乱下す（物の姿形がさまざまにまじりあって描かれる）。」そして最後に至れば、先に立てた「意」は収束し、節ごとにそれぞれの分を付与されて仕上がることになる。

しかし、こうすんなりと行くとは限らない。だから、文章を作るには、「ただ多く意を立つ。左穿右穴して、心を苦しめ智を竭さしめ、必ず須く身を忘れて、拘束すべからず。思いもし来たらば、すなわち須く情（心の働き）を放にしてかえってこれを寛やかにし、境（対象）をして生ぜしむべし。しかる後に（生じた）境をもってこれ（心）を照らせば、思いはすなわち来たり、来たればすなわち文を作る。もしそれ境思来らたらざれば、作るべからざるなり。」いずれにせよ、文を作る人は、常に意を「作」さねばならず、「心を天海（宇宙）の外に凝らし、思いを、元気の前に用い（万物の根源をなす気にまで馳せ）」ることによって、個性的な創造性を発揮することができるのである。

このように、対象に対して心を凝らして目撃し、境を穿って対象の奥深くに入り込み、突き抜けて宇宙を胸中に収めるところまで行くのは、実に、曼荼羅の観想にも似たところがあると言えよう。先に、詩家の中道は空門の証性に中道有るがごとし、という意味の文章に出会ったのであるが、こうした唐人の文学論を通じて、それぞれのレベルでの考え方を尊重しながらも、お大師様が、その真言密教の広大無辺の御手によってより深いところから大きく包みこんでおられることが知らされるのである。文学論一つとっても、高山の絶頂から万象に臨み掌中にあるがごとき感があり、個々の論文や作品の背後から透き通ってくる太陽の眼差しを感じるのである。

次回発行は９月１日予定

特集　未来とは何か

Editor ABE RYUJU Art Director and Photographer/SHU FUJIWARA
Editorial Staff/ SAMURO MIWA TOKUMARU KOJI ONUKI REIO MOTOYAMA KAZUFUMI OOYAM CHIGUSA
HOMEPAGE DESIGN MASAAKI OKA HIROYUKI HANAWA Making Mechanic SANMITUSHA+BENRIDO Printing KORINKAKU
EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIIN S.H.C

〒158 東京都世田谷区等々力3-15-1 電話03-3705-1622 ファクシミリ03-3703-4979

Shingon Horonic Irowanioedo 第一巻第十九号 平成十三年水無月 一日発行